

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏 名 黒岩 三恵

本論文は1320年頃から1340年代にパリで活躍した彩飾画家、通称「聖王ルイ伝の画家」(以下、「画家」と略記する)に関するモノグラフィックな研究である。

本論文は「画家」の様式検討を議論の骨格とする第一巻、「画家」が制作に関与した彩飾写本の作品総目録の体裁を採る第二巻、作品図版を集めた図版巻の三部から成る。主論をなす第一巻では、現存作品の編年、工房制作の実態、空間表現の源泉、欄外装飾の機能、賦彩方法の特徴、服飾表現のシンボリズムなど、多様な角度から「画家」とその周辺画家の作品に詳細な検討が加えられる。作品編年の項では、これまでの研究史を踏まえ、中世後期写本美術への接近手段として「様式分析」の方法的可能性についての弁明を行ったのち、年記の存在する『ベルヴィルの聖務日課書』他の二写本を様式と年代の基準作例としつつ、「画家」の作品の編年を試み、これまで位置づけの確かでなかった『危険な墓所・ライオンの騎士』を1320年頃の「画家」の手に帰し、他の作品と併せて様式の変遷を明らかにしている。パリ派写本工房における制作分業システムを論じた項では、「画家」の共同制作者を特定し、なかで「ベルスヴァルの画家」と「Ross.lat.307の画家」が「画家」の経営する工房で助手として働いていたことが明らかにされる。また、「画家」の作品に見られる透視図法的な空間表現が、十四世紀初頭のイタリア絵画に由来するものであり、それらが通説に言われる通りの「ジャン・ピュセル経由」のみならず、他の画家の作品を経由してパリの宮廷にもたらされていた可能性が指摘される。さらに、後続の議論のなかでも、「画家」の欄外余白装飾について装飾頭文字に附属する棒状装飾の形状から五つの類型を同定したこと、賦彩法として欄外等の二次装飾には赤・青の対比が、挿絵には中間色がそれぞれ用いられるという特徴を抽出したことなど、新しい知見が導き出されている。

第二巻は、いくつかの例外はあるものの、「画家」の関与した彩飾写本を実地に精査し、それらについて美術史的・書誌的な事実を網羅的に記述したもので、膨大な参考図版を掲げた第三巻とともに本論文の基礎資料の体を成しており、今後「画家」について研究しようとする者にとって有価な基本文献ともなり得る。

本論文はピュセルの影に隠れ、その存在が見えにくかった「画家」の仕事について、一次史料の実証的な検討を踏まえつつ、様式論的な立場からその全体像に明確な「輪郭」を与えようとするものであり、図像やそのプログラムについての解釈論を遠ざけている点にやや不満が残るものの、全体としての考証性と網羅性において、これまでにない独自の研究とすることができる。以上により、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。